

# 病とたたかう

— 複十字の道を歩みて —

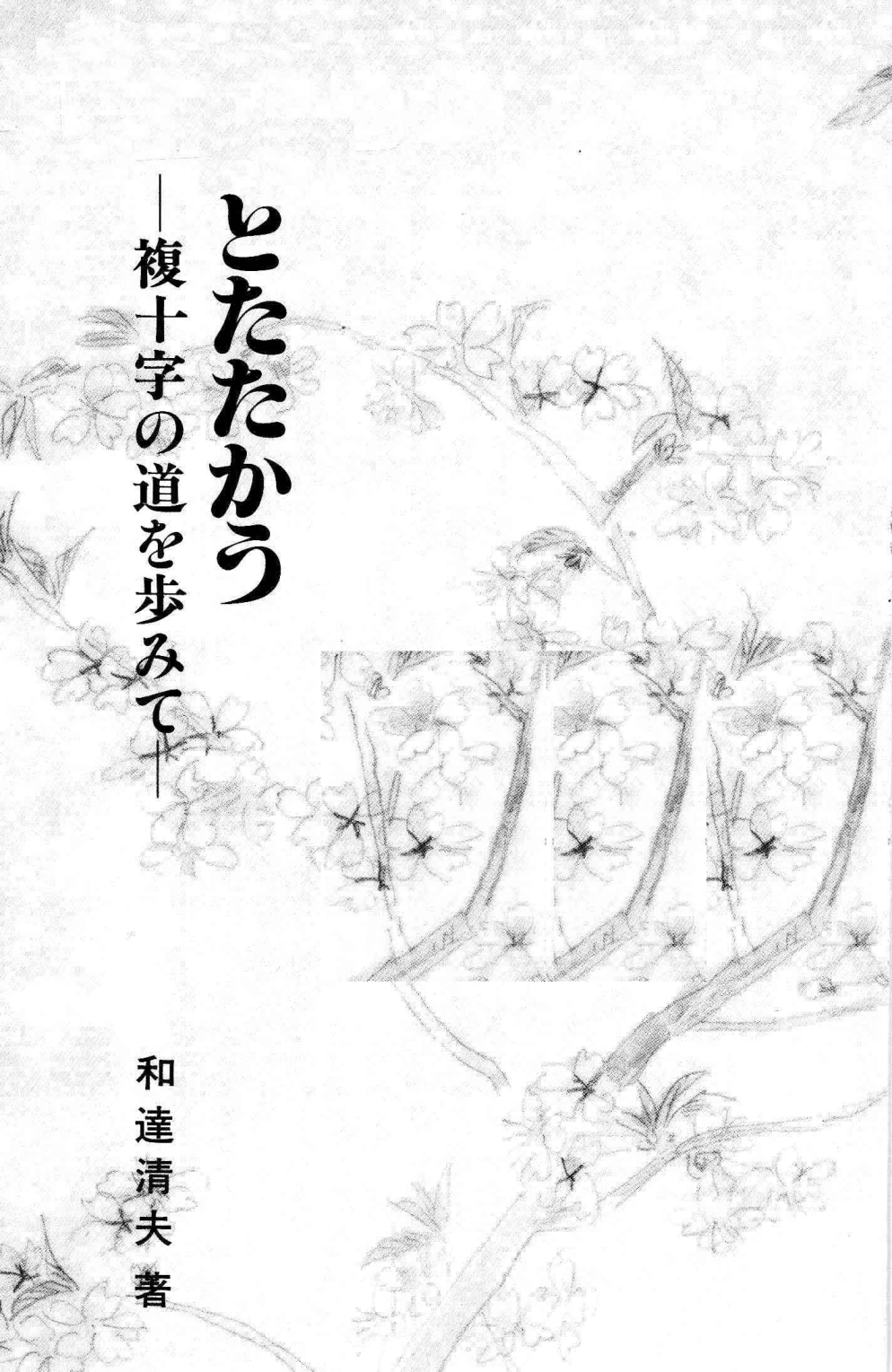
和達清夫 著



# とたたかう

— 複十字の道を歩みて —

和達清夫 著



## 著者略歴

和達清夫（わだち・きよお）

1902年名古屋に生まれる。東京開成中学、一高を経て1925年東大理学部物理学科を卒業、直ちに中央気象台に入り、1947年に中央気象台長、後に気象庁長官となり1963年に退官、同年国立防災科学技術センター所長、1966年埼玉大学長、1974～80年日本学士院長となる。

1985年文化勲章受章、名誉都民の称号を受ける。

現在、中央公害対策審議会長、東京地学協会長、東京都防災会議地震部会長など。

著書に『青い太陽』『雨・風・寒暑の話』『地震の顔』など。

## 病とたたかう——複十字の道を歩みて

昭和62年12月1日 印刷

昭和62年12月13日 発行

定価 1,800 円

著作権者との  
申合せにより  
検印省略

著 者 和 達 清 夫

発行者 佐藤今朝夫

制作・小川喜代美

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

印刷・セイユウ写真印刷株式会社 製本・大口製本

## まえがき

この書は、皆様の御厚意で出版することになりました私の肺病文集とも申すべき随筆集であります。私は若い頃肺病にかかり、永い間療養生活を送り、その後もこの病のためにいろいろ苦勞し今日に到りました。療養時代から、その後回復者として地球を相手に勉強したり働いたりした間に、折に触れて書きましたものがここに集められております。

思えば、あれほど往時若い人たちを苦しめ、悲しい運命を与えた結核病、すなわち肺病も、今ではほとんど世間から忘れられている有様であります。医学の進歩と、世の人びとの理解と善意とが、よくここまでこの大きな不幸を無くして下さったと、感謝とともに深い感慨を覚えます。そして、この中の文章が、こうした明るい結核克服の時勢になる以前に書かれたものであるため、今から見ると病者があまりに悲愴がり、むきになり過ぎているように感じられることと思いますが、それも当時の結核がいかに世の重大な問題であったかを御察し願うことによって、御理解頂きたく存じます。

しかし、世界にはまだ肺病に苦しむ人の多い国もあります。また、こうした多くの人たちに悲しみと不幸を与える病気が、これから先も出てくるであります。そんな場合に少しでもお役に立てばと思い、この書を世に出すことにいたしました。

ここに掲げた文章の中には、私が若かった時代に書いたものが多くあります。読み返すと、未熟さが目立ち恥ずかしく思いますが、それもその時代に病気に苦勞した若者が一生懸命に書いたものとし

て、そのまま出させて頂きました。そして今更の如く、私自身がはからずもこの歳まで生き延びて、どんなに多くの人たちの温情の中で過ごしてきたかを考えると、心から有難く思います。

私は幼い時から自然に親しみ、地球を相手に今日までほとんどその方面で働いてきました。御承知のように、日本はよい気候に恵まれた国ですが、また一方では地震や火山噴火や台風などによって昔から何度も災害を受けています。私が若い時代に過ごした永い療養生活は私を一層自然に近づかせました。そしてその後、戦時中や戦後の苦しい時代もありましたが、ひたすら自然と取り組んで仕事に打ちこむことができて幸せであったと感謝しております。

近頃では、科学技術の発達とともに私たちを取り巻く環境は、自然のものより人間によって造られたものが多くなりつつあります。このような世の動きの中にあつて、私たち人類は生物の一つとして、自然を離れては存在しえないことを思い、あくまで自然の恩恵の中で人びとの愛を信じ、謙虚に生きたいと願うのであります。この書をお読み下さる方々に、こうした私の願いが御察し頂けるとすれば、私の喜び、これに過ぎるものはありません。

終りに、この書の出版につきまして複十字会——肺病に悩み共に励まし合つて来た回復者の仲間——の方々の御厚情に心から感謝致すとともに、ことに編集、校正その他いろいろ御面倒を見て下さった、村上さんをはじめ姉崎、田辺諸兄姉に厚く御礼申し上げます。

一九八七年十月

和達清夫

## 目次

### 第一章 回復への道……………2

|                |    |
|----------------|----|
| 幼年期の思い出        | 2  |
| 中学時代―初めて病む     | 7  |
| 秀才たちと結核        | 14 |
| 兄病む            | 20 |
| 兄の死            | 27 |
| 結核の兆し          | 32 |
| 暗転した新婚生活       | 38 |
| サナトリウムで学んだ自然療法 | 48 |
| 武蔵野から熱海へ       | 56 |
| 最悪の日々          | 63 |
| 姉の死と回復期        | 72 |

回復そして再出発

81

第二章 あきらめと希望と……………

89

肺病人種／心機一転／あきらめと努力／病者の道徳／馬鹿になる生活／潜める情熱／手をつなぐ／共に大いに泣こう／病人も世間を知れ／入道雲の彼方にも／科学的でない話／幸福について／健康者へ贈る

第三章 病友鎮魂……………

115

浅間の煙

116

夜光雲

123

第四章 小心翼翼……………

137

第五章 不惑随想……………

157

不惑

158

犬

163

ラジオ体操

168

# 第六章 結核療養者の苦闘……………

179

結核暗黒時代／結核と闘った人たち／それぞれの生き方／正しい療養法を求めて／結核の夜明けを迎えて

# 第七章 若い世代へ……………

191

幸福は差し引きできない／勇氣／自分ひとり

# 第八章 難病を共にした人々へ……………

197

あれからの歲月／月日は忙しく過ぎゆく／近頃思うこと／文明の余沢に溺れ／生き甲斐／風邪／生ある限り／長い旅／小西長栄さんを憶う／エジンバラ公の思い出／吉木三郎さんを憶う／希望の灯／いずれはひとりで／陽は輝く／真剣に生きる／

# 第九章 忘れ得ぬ先輩と恩師……………

221

黎明を行く人——茂野吉之助さん

うらやましい田辺さん

寺田寅彦先生

238

終戦前後の藤原咲平先生

229

247

# 第一章 回復への道

——半自叙伝的に——



## 幼年期の思い出

私が初めて肺病という言葉を知ったのは、まだ学校へも行かない幼い頃、私の家に来た女中のことを祖母と母とが話していたときであった。「あの娘のうちでは、この間も兄が肺病で死んでね、それが気になるのだよ」と祖母はその女中の一家のことを話していた。

女中の名はふみといった。私の家ではみよと呼んだ。本人もその名が好きで、自分でも喜んでみよと言っていた。高等小学校を卒業しないうちに、祖母に故郷から連れられて、大阪の私の家に来た。大阪に来てからは、私達と夜店に行くと古本の店で、いろいろの教科書を買って、自分で夜など勉強していた。二十歳頃までうちにいたが、その頃は立派に手紙も書き、むつかしい本もよく読んだ。子供の時分は、私の姉や兄のお伽噺の本を喜んで読み、後には小説が好きになり、新聞の連載小説にはいつも夢中になっていた。

年頃になって、可愛らしい娘になり、近所の人に可愛がられた。本人は活動や芝居が好きで一度見ると、その筋を上手に人に話し、また役者などもよく覚えて知っていた。私が学校に入ってから、よく一諸に活動を見に行ったが、夜遅くなって眠っている私をおぶって、遠い道を帰って来たことも何度もあった。あとでみよがよくいった。自分とそう年の違わない大きい坊ちゃんをおぶって帰るのは、重くてとても辛かったが、活動を見たさに、いつも辛棒したというのである。

このみよが二十を越した頃であつたが、時々疲れたような白い顔をして、私に、この頃毎晩いろんな夢を見るのですよ、と話をした。それから軽いせきををし、瘦せが目立つようになった頃には、子供の私にはよく分からなかったが、家人の誰の目にも、肺病ではないかと気づかわれた。お医者様にはつきり肺病と診断されて、故郷に帰つたのは、それから間もなくのことであつた。

みよは、故郷に帰つた。そして、私の祖父の家は医院であつたが、その病室の一隅で、しばらく養生していたが、結局死んだ。

私が後年肺病に苦しんだのは幼い時に、この女中から伝染したためだと言う人がある。私は自分が幼い時から肺病になりそうな体質であつたから、みよの肺病がどうであらうとも、所詮、後年の肺病は運命であると思つてゐる。よしまた、みよからの伝染が後に私が苦しんだ肺病に対して大きな原因をなしてゐたとしても、この女中が自分の幼い時に何くれと世話してくれたことを考えると、私はそれを少しも恨む気にはなれない。

今でも、私は肺病のことが出るときに、よくこのみよのことを思い出すのである。みよは貧農の家に生まれた。兄弟は沢山あつたが、兄や姉は子供の時から鉄道や織屋に出て働いてゐた。そして兄や姉と同じようにみよも幼い時から労働して、若い身空を肺病に犯されて職場に倒れたのである。これはこの頃の社会状態における貧しい家の悲惨さをあらわしていると思う。

彼女の一家は、皆顔立ちがよくて、伶俐であつた。ことにみよはロマンスを好み、読書や演芸やゲームが好きであつた。陽気で大勢の人にも好かれ、よく働き、よく楽しみ、そして肺病で死んだ。その後、私は肺病人によく見受ける一つの型を、このみよに見るのである。

私が肺結核という言葉覚えてのは、小学校の四年か五年のときである。大阪の小学校であったが、その頃の結核予防協会とでもいう学校を巡回講演をするものが来て、講堂で肺結核に関する話があった。多分、この時代の肺病観であろうが、肺病は遺伝病でなく、伝染病であって、菌を防ぎさえすればよい、伝染を怖れよ、出来るだけ伝染を防げというのが講演の要旨であった。

この時の話は、幼い私の頭に実によく入ったので、これは後年思い出しても不思議なことである。第一にこの話は、小学生の私にも割合に面白く話がよく分った。そのため、近頃も私はよく思う。結核予防の話が、小学生に面白く聞かれることがあり得るということ、すなわち、お伽噺や冒険談でなくとも、衛生や修身の地味な話でも、上手に話をすれば、児童はよく聞いてくれ、その効果があるということ。

もちろん、このときには、沢山掛図を見せて説明したが、それが効果的であったのかも知れない。その絵の中で、一番記憶に残っているのは、若い娘さんが、美しい着物を着て、病気に悩んでいるところを、お母さんが介抱している絵であるが、この娘さんの着物に、赤い短い棒が一杯引いてあって、それが結核菌であることを示したものである。この絵は、古着屋から買った着物が、前に肺病の人が着ていたものであって、そのために伝染して発病したということを示すのであることは言うまでもない。

もう一つの絵は、女の人が川で食器や着物を洗っている所である。その食器や着物にも、また洗っている女の人の手にも、前の図と同じように、赤い印が一杯ついており、手や食器から、赤い印が、

川の水に流れ出している所である。病人の衣類や食器を川で洗うと、川へ結核菌が流れ、これがまた、他のものに附着して、伝染することを注意したものだと思う。

このように、掛図はことごとく結核菌の伝染を注意するような絵であったと思っているが、その絵は、ことに、赤い菌の印が、手や着物についている不気味な印象と共に、幼い私の頭に強く残って、大学を出る頃まで、この絵の思想は、私の肺病観の一部を形成していたのである。私の幼い頃にも、この伝染予防の講演は一軒の家の内で、次々と肺病に倒れることの多い実例について、いかにも明快に理由を説明したように思われた。このことはまた、当時の世の人達が幼い私と同じように思い、この思想に風靡されたのも無理からぬことだったろうと、思い出すのである。

私が後年肺病になったとき、思えば、この講堂から得た知識は療養上むしろ有害無益のものであった。これも、その頃の若い人達が、肺病療養に対し誤った考えから、なかなか抜け切れなかった事実と符合するものと思う。

やはり、この頃のことであるが、母につれられて東京に来た時、駿河台の親類の家を訪れた。その息子さんは文学士で大学の先生をしているのだが、長いこと病氣なので、その見舞いに行くのであると母は私に話した。子供心に、偉い人に会いに行くのだと緊張して出掛けたが、まずその家が昔風の武家屋敷で、門の両側に長屋があるのが、いかにも芝居じみていて珍しかった。玄関を上って奥の間に通されたが、南向きの日当たりのよい座敷に、その人は白いシーツの上に寝て、その側に看護婦さんが座っていた。私等と元氣そうに笑って話をしたので、私は別に何とも思わなかったが、あとで

母が、ほかの人に向かって、あの病室に入った時、記入した体温表が部厚く綴じてあって、ずしりと置いてあるのを見て身震いしたと話したのを聞いて、子供心に初めて、その人が肺病で、長いこと寝ていることを知った。たしかに思い出すのは、病人の枕もとにあった痰壺と、体温器と、そして部厚な体温表である。

その後十余年を経て、私自身が同じく痰壺と体温計と、そして、何十枚もの体温表に克明に記入する境遇になろうとは、そのとき思いもかけぬことであった。

## 中学時代―初めて病む

肺病——この言葉のひびきが、どんな気持をその当時の人々に与えたか、それは近頃の人達には想像しかねるところではなからうか。今日でも、ずっと田舎に行けば、あるいは同じような状態にあるかもしれないが、その頃といえ、肺病は青い顔をして死ぬもの、肺病という言葉は死神の別名として恐れられ、気味悪がられていたのである。それに、あの家は肺病の血すじであると噂するなど、肺病を遺伝病と考えるものが多いために、肺病恐怖は一層ひどかった。もちろん、肺病は遺伝ではないという知識は、割合に早くひろまったのであるが、伝染病であることが普及された結果は、肺病を一層恐れさせ、肺病者をますます嫌悪迫害するように役立ったにすぎなかった。

幼い頃の私においても、肺病に対しては、上述の考えを一步も出ていなかったことは当然である。むしろ、私が神経質な子供であり、しかも身近い所に肺病を見聞きしているので、その恐怖は一層激しかったといつてよい。

特に、自分に最も影響を与えたのは、私の従兄弟の一家に起こったことである。その頃、私には兄一人姉一人しかなく、しかも姉は病身であったために、この従兄弟達（一人は私より一つ上、一人は一つ下であったが）とは兄弟のように仲よくしていた。

二人の従兄弟は幼い時母に別れ、その後父が肺病のため、関西のある海岸に転地していたため、私

にとつても祖父である家にいた。私は、この従兄弟達と親密にすればする程、その境遇に同情し、肺病に限りない憎悪を持った。

ある時、祖父が、この二人の孫をつれて、彼等の病める父を遠い関西の地に見舞いに行くことがあった。そして私も、この旅行に何かの都合で、途中まで行を共にしたのであった。子供のことであったから、従兄弟達もさして悲しそうな顔をしていなかったが、私は子供心に、従兄弟達の負わされている痛ましい運命を思い、それを口にする事も出来ず、独り胸をいためていたことは、忘れ難い思い出である。病人、すなわち叔父は、喉頭結核で、その後しばらくして亡くなったが、私達はそれをいずれば来るべき悲劇として、ただなすことなく見守っただけであった。

誰でも子供の頃に近親や友人のうちに、肺病のために悲しい運命に陥ったものが、何人も居たであろうと思う。このとき、もし、正しい結核に対する知識が、幼いものの心に深く刻みこまれているとすれば、その者にとつて、将来長い間の幸福になるであろうが、悲しいかな多くの場合はそうでないと言える。私の場合も、身近における沢山の肺病の悲劇は、いたずらに肺病嫌悪と肺病敬遠の気持を私に植え付けたに過ぎなかった。

後に私は、物理学を専攻とするようになった。物事を科学的に一番考えなければならぬ職業を選んだ私が、自身で肺病に苦しむまでは、本当に肺病を真剣に考え、理解しようとする理性を持つとうとしなかった事は、いかにも恥ずかしい次第である。しかも姉と、兄とを肺病で失っている私においてそうであるから、一時代前の世の人の肺病観は、推して知るべきであろう。そして今日において、それはどのくらい進歩しているであろうか。